Naeboonart 2022

苗穂アートプロジェクト

苗穂地区を起点にした拠点交流型の国際アートプロジェクト

令和4年度活動報告書

Annual Report 2022

npo S-AIR

新しい日常の中のAIR

AIR in the New Normal

柴田 尚　特定非営利活動法人S-AIR代表

「三年ぶりか…」。

2022年。ようやく、対面（オンサイト）のAIRが戻ってきた。

イギリスのロンドンを本拠地にするトロイハウス芸術財団からは、メイタオ（Meitao Qu）を、ベトナムの独立系コレクティブ「ヘリテイジ・スペース」からは、キュレーターのトゥアン（Nguyen Anh-Tuan）を招へい、そして、札幌からはイギリスへ伊藤隆介、進藤冬華という二人の作家を派遣することができた。まだまだ、新型コロナの気配が残ってはいるものの、海を超えたアーティストのエクスチェンジがようやく復活したのだ。

そして事務所のある苗穂地区をテーマに、「なえぼのアートスタジオ」、「0地点」の二つの共同スタジオを結んで20名以上の作家やまちづくり関係者が参加した『naebonart 2022』というオンサイト企画も実践できた。

しかし、オンサイト活動が復活したとはいえ、どこかかつてのAIRとは違った感覚もある。

思えば日本では、2020年初頭から始まった新型コロナシンドローム以降、日常は常にオンラインかオンサイトかという選択が問われるようになっている。

私が勤める大学は、いち早く完全なリモート化によるオンラインシフトが行われた業種だが、オンラインはさらに、ZoomやTeamsなどのリアルタイムと、後でも自習できるオンデマンドを選択することになっている。また、新型コロナの感染者や濃厚接触者と非感染者のどちらにも対応するよう、オンライン＋オンサイトのハイブリッド型で行われる授業も登場している。

「果たして、AIRはオンライン化できるのか？」

旅をベースに滞在制作や調査などをベースとするAIR事業だが、日本では社会の流れに合わせてリモートAIRというオンライン概念を積極的に取り入れ、国際的にも実践してきた（世界では必ずしも一般的ではない）。S-AIRも海外作家と日本の市民がオンライン上で国を挟んでの共同制作など、様々な新しい制作手法も発見した。

しかしやはり、オンラインで全てができるわけではない。オンサイトの日常生活で自然に感じる「匂い」、「味」、「触感」を伴った開放感やコミュニケーションなどのダイナミズムは、やはり、オンラインでは得難いということも強く実感することになった。

オンラインとオンサイトを行き来する日常は、新型コロナが絶滅した後にも、それぞれの特徴を活かしながら今後も残るだろう。新たな日常の中のAIR。今年はそのスタートの年といえるかもしれない。

naebonart 2022

苗穂アートプロジェクト

―苗穂地区を起点とした拠点交流型の国際アートプロジェクト

Hisashi Shibata, Director, NPO S-AIR

"It's been three years..."

The year is 2022 and on-site residency is finally back.

We were delighted to be able to invite Meitao Qu from Troy House Art Foundation based in London, UK, and curator Nguyen Anh-Tuan from Heritage Space, an independent space in Vietnam to Japan, and from Sapporo we were able to send two artists, Ryusuke Ito and Fuyuka Shindo, to the United Kingdom. Although there were still signs of the Covid pandemic, we were able to finally revive the exchange of artists overseas.

Moreover, based on the theme of the Naebo district where our office is located, we were able to carry out our on-site project, "Naebono Art 2022" connecting two collaborating studios, naebono art studio and Zero Chiten, in which more than 20 artists and people involved in town development were able to take part.

However, even though our on-site activities have been revived, something feels different from the previous residency.

In retrospect, since the start of the Covid pandemic that began in early 2020, it feels like in Japan we have had to choose between online and on-site in our everyday lives. The university where I work was the type of industry, which was one of the first to shift to an online form choosing to go fully remote, and online moreover enables a choice of real-time study using Zoom or Teams or on-demand study where students are able to study by themselves at a later time. In addition, in order to deal with both students who had caught Covid and close contacts and those who were free of Covid, a hybrid type of online + on-site classes also emerged.

"Is it really possible for residency programmes to go online ?"

Artist-in-residence programmes are contingent on research and production based on travelling, but in Japan, we proactively adopted the online concept of remote residency adapting to the trends of society and also implemented this internationally (although this was not necessarily the case in other countries throughout the world). S-AIR also discovered various new production techniques such as online collaborative productions between overseas artists and Japanese citizens transcending borders.

But to reiterate, not everything can be done online. There is a strong sense that the dynamism of openness and communication that accompanies "smell", "taste", and "touch" that you feel naturally in your everyday life is difficult to obtain online.

The daily routine of going back and forth between online and on-site will continue to exist even after Covid has died down, taking advantage of the merits of both forms. AIR in the new normal. Maybe this year is when it starts.

苗穂アートプロジェクト
Naebonart 2022
―苗穂地区を起点にした拠点交流型の国際アートプロジェクト

再開発で古い家屋や空き地と高層マンションの建設という新旧入り混じった苗穂地区の隙間に、2017年7月より、地元のアーティスト達が使われていなかった倉庫を再活用し、共同アトリエ「なえぼのアートスタジオ」を創り始め、S-AIRの事務所もそこへ移転した。
昨年2021年には、近くに築95年経過した古民家を改造した共同アトリエ「0地点」も誕生。
共同アトリエが、二箇所同じ地域に生まれたのは、札幌の美術史では初めて。
この二か所の共同アトリエを軸とし、苗穂地区をテーマにしたアートプロジェクトがスタート。
果たして、地域のアートシーンにもなりうるのだろうか。

In July 2017, a group of local artists based in Sapporo collectively established naebono art studio in a former warehouse building in Naebo, which is a designated redevelopment area consisting of a mixture of old houses, abandoned buildings, and high-rise flats. S-AIR also relocated its office to naebono art studio.
In 2021, another group of artists refurbished a 95-year-old house nearby in the area and transformed it into artists' studios called Zero Chiten.
This marks the first nstance in Sapporo's art scene history where two artists' studios are located in the same area.
This art project was launched with the intention of connecting the two artists' studios, with a focus on the Naebo area, and potentially creating a local art scene in the region.

Contents

新しい日常の中のAIR ／柴田 尚 …… back cover - p.1
AIR in the New Normal / Hisashi Shibata

NAEBONART 2022 概要 …… p.2
Outline of NAEBONART 2022

招へいプログラム …… p.3
Residensy Programme

アーティスト招へいプログラム／メイタオ・チィー …… p.4 - 7
Artist-in-Residence / Meitao Qu

キュレーター招へいプログラム／グエン・アン・トゥアン …… p.8 - 11
Curator-in-Residence / Nguyen Anh Tuan

派遣プログラム …… p.12- 17
Oversea Programme

進藤冬華 …… p.14 - 15
Fuyuka Shindo

伊藤隆介 …… p.16 - 17
Ryusuke Ito

ウォールアートプロジェクト&協働オープンスタジオ
Wall Art Project & Open Studio

なえぼのアートスタジオ …… p.18- 21
naebono art sutadio

0地点 …… p.22- 25
Zero Chiten

トーク／フィールドワーク …… p.26- 27
Talk / Field Work

S-AIRについて …… p.28 - 29
About S-AIR

付録 / Supplement

MAP …… p.30 - 31

1999-2021Artists & Partners …… p.32 - back cover

Residency Programme
招へいプログラム

令和4年度は、連携団体とのエクスチェンジプログラムを、3年ぶりに対面で実施。
Troy House Art Foundation（イギリス）からは、アーティストのメイタオ・チィーを招へい、札幌からは進藤冬華と伊藤隆介をウェールズにある歴史的建造物の敷地に設けられた同団体の新しいレジデンススペースに派遣。
新たな連携先であるHeritage Space（ベトナム）からは、同団体アーティスティックディレクターのグエン・アン・トゥアンを招へいした。

After 2 years of running programmes online, we were finally able to exchange artists in-person this year. We hosted Meitao Qu, a Chinese-British artist from the Troy House Art Foundation in the UK, who, in turn, hosted Sapporo-based artists Fuyuka Shindo and Ryusuke Ito at their new artist-in-residence programme located at Troy House, a 17th-century manor house site in Wales.
Additionally, we established a new partnership with Heritage Space in Vietnam and had the pleasure of hosting their artistic director, Nguyen Anh-Tuan.

招へい作家滞在報告展
2022.10.4 ㊋ – 10.10 ㊊・㊗ 12:00 – 19:00
会場
なえぼのアートスタジオ フリースペース

Residency Programme(Artist)
招へいプログラム（アーティスト）

メイタオ・チィー
Meitao Qu

美術作家 Artist

ロンドンと北京を拠点に活動。イメージの生産と流通、そしてそれらがジェンダー、人種、国家に関する言説を形成する上で果たす役割について制作を行い、衣装から建築まで、視覚化される形態が想像力を刺激する「小道具」としてとのように機能するかに関心を持つ。語りや架空の世界を構築することを通して、物質と仮想を結びつけ、概念と現実の間を行き来するような作品を制作する。オックスフォード・カイフェン修士課程奨学金の助成を受け、ラスキン美術学校で修士課程修了（2021年）、コートールド美術研究所で修士課程（2020年）修了。ブルームバーグ・ニューコンテンポラリーズ2022に選出されたほか、近年の展覧会には「Adventures in Fact」The Residence Gallery（ロンドン／2022）、「The Annual Metaverse Art @ Venice」Spazio Thetis（ベニス／2022）などがある。

Meitao lives and works between London and Beijing. Her practice is concerned with the production and circulation of images and the role they play in shaping discourses of gender, race, and nation. From costume to architecture, she is interested in how forms of visualisation operate as 'props' to stimulate imaginations. Through storytelling and worldbuilding, her work brings together the material and the virtual to contemplate the interplay between ideologies and realities. She holds an MFA from the Ruskin School of Art (2021), funded by the Oxford-Kaifeng Graduate Scholarship, and an MA from the Courtauld Institute of Art (2020). She was selected for Bloomberg New Contemporaries 2022, and recent exhibitions include 'Adventures in Fact', The Residence Gallery, London (2022) and 'The Annual Metaverse Art @ Venice,' Spazio Thetis, Venice (2022).

meitao-qu.wixsite.com/works

60 Days in the Land of Kibori Kuma

木彫りの熊の地での60日間

札幌に来るまで、私はサッポロビール以外に札幌のことをよく知らなかったし、北海道には、青々とした緑の風景の中で牛が放牧されている印象しか持っていなかった。S-AIRのおかげで、自分だけでは体験できなかったであろうその土地の多様な面を見ることができたため、その先入観はすぐにかき消された。そのため、展覧会の準備を始めるにあたっては、滞在中に出会ったすべてのイメージや物語、景色をひとつにまとめたものを制作したいと考えるようになっていた。

「北海道には歴史がほとんどない」「伝統が欠如している」という言葉が、来た当初から印象に残っている。私は英国に住む中国人として、祖国を離れている時間の方が長い人間として、また、文化大革命後に生まれた広い世代のひとりとして、常に伝統的文化と自分たちとの関係性について関心を持っている。自らの作品を通して、人々や人種、そして場所をつなぐ目に見えない絆と、それが日常生活の視覚文化の中においていかに継続的に復元されるかを探求したいと考えている。そのため、現地の人々が彼らの伝統文化との関係についてどのように感じているかについて、より知りたくなった。

私は10代の頃に日本を訪れたことがあるが、伝統工芸を熱心に愛好する両親が、現代の日本にはまだ伝統が生きているように感じられると話していたのを覚えている。しかし、この話題において北海道はもちろん特殊なケースで、日本の支配下になってからは150年しか経っていない。にもかかわらず、北海道はそのような言葉から想像されるような「タブラ・ラサ（ラテン語で「白紙状態」の意）」とは程遠いことを、私はすぐに知ることになった。函館から三笠まで、私はこの島の先史時代の過去と、日本独自の近代化の過程におけるその重要性について学んだ。古代から現代の狭間で、私は「歴史」という分類の中に含まれるものと除外されるもの、そしてそのような定義によって画定される負の空間に興味を抱くようになったのだ。さらに私は、日本の北海道開拓がいかに欧米の植民地政策の戦略を取り入れたものであったか、そして、最も権威のある庁舎という建物を欧米様式にすることでその決意を顕にしていたことに強い関心を持った。札幌の中心部を歩いていると、しばしばアメリカにいるような錯覚に陥るが、それと同じように、北海道は先住民と入植者の文化の間にある、分断された歴史の複雑な問題を体現しているかのようだ。

作品制作のためにモデルや素材を集め始めた時、自らが経験したことの集合体の中にアイヌ文化をどのように取り入れたら良いか分からずに、私はしばらくの間、行き詰まりを感じていた。ステレオタイプな表現に陥らないようにしたかったのだが、何も取り入れなければさらに不可視性を強めてしまう。白老の芸術祭を訪れた際、柴田さんが一足のアイヌの長靴を指さして、これは昔観光客向けのパンフレットの表紙に掲載されていたので、人気のお土産品だったのだと教えてくれたのを覚えている。そのように私は、来訪者として、また観光客として、どのようにアイヌの存在に出会ってきたかということについて、滞在中に考えるようになった。木製の彫刻から復元された集落まで、私の経験は主に商業的なグッズや博物館の展示によって選別されたものだった。最終的に、和人的観点からアイヌ文化の表象に焦点を当てるために、ガチャポンの「木彫りの熊」を利用した。それは先住民族の文化が過去に固定化されてしまうことを回避し、これらのイメージが何を行い、また何を意味するのかについて批評的に考えるためだ。

この作品のための調査は、文化や行為遂行性、遺産観光の関係や、アートがこれらの文脈で果たす役割を考えることについての私の関心を、より新たなものにしてくれた。北海道での経験は私の制作に影響を与え続けるだろう。そして、私の滞在をとても楽しく、実りあるものにしてくれた皆さん、私を自宅やスタジオに迎え入れてくれ、作品や物語について教えてくれた皆さんに感謝したい。この二か月は本当に楽しくて、近い将来また戻ってくるのが待ち遠しい。

Before coming to Sapporo, I didn't know much about the city except for Sapporo beer and for Hokkaido, I mostly had the image of cows roaming around in lush green landscapes. Thanks to the generosity of the S-Air team, these preconceptions were soon broadened as I was able to see so many faces of the island that I otherwise would not have had the chance to experience.
As such, when I started to prepare for the exhibition, I wanted to make something that would bring together all the images, stories, and vistas that I had encountered during my stay.
When I first arrived, phrases like 'Hokkaido has little history' or 'there's a lack of tradition' really stuck with me from the get-go. As a Chinese person living in the UK, I've always been interested in our relationship with traditional culture, both as someone who's spent more time away from their homeland than within it, but also as part of a wider generation of Chinese people born after the Cultural Revolution. Through my work, I hope to explore the invisible ties that connect people, race and place, and how this bond is continually reinstated in the visual culture of our everyday life. As such, I was keen to learn more about how the local people felt about their relationship to traditional culture.
I had visited Japan as a teenager and I remember my parents, who are keen lovers of traditional arts and craft, talking about how they thought that tradition still felt alive in contemporary Japan. However, Hokkaido is of course a special case in this discussion, with only 150 years under Japan. Nevertheless, I quickly learned that the island is far from a tabula rasa those phrases might otherwise indicate. From Hakodate to Mikasa, I learned about the island's prehistoric past and its importance in Japan's own process of modernisation. Between the ancient and the modern, I became interested in what was being included and excluded from the category of 'history', and the negative space that was being demarcated by such definitions. Moreover, I was fascinated with how much the development of Hokkaido under Japan borrowed from strategies of Euro-American colonial practices, quite literally visualised in the decision to erect its most important institutional buildings in the same style. Walking around central Sapporo, I often felt like I could be in the States, and in similar ways, Hokkaido embodies the complex questions of divided histories between indigenous and settler cultures.
When I started to gather models and materials for my work, I felt really stuck for a while because I didn't know how to include Ainu culture within this assemblage of what I had experienced. I wanted to avoid falling into stereotypical representations, but not incorporating anything would reinforce an existing invisibility. When we visited an art festival in Shiraoi, I remember Shibata pointing to a pair of Ainu boots and saying that they were once a really popular souvenir because it had been on the cover of a tourist pamphlet. As such, I started to think about how I, as an outsider and a tourist, have encountered Ainu presence during my stay. From woodcraft sculptures to reconstructed villages, my experience was one that was primarily filtered through commercial goods and museum display. In the end, I chose to use 'kibori kuma' in gachapon form to focus on the representation of Ainu culture from a Japanese perspective, in order to bypass the reification of indigenous cultures that often fixes them in the past, and to think critically about what these images do and mean.
Researching for this work has renewed my interest in thinking through the relationship between culture, performativity, and heritage tourism, as well as the role that art plays in these contexts. I am certain that my experiences in Hokkaido will continue to influence and impact my practice, and I would like to thank everyone who has made my stay so enjoyable and fruitful, welcoming me into their homes and studios and sharing with me their work and stories. It has truly been a delightful two months and I can't wait to return in the near future.

連携団体 Partner Organisation

Troy House Art Foundation

トロイハウス・アート・ファウンデーションは、上海生まれのアーティスト兼プロデューサーであるヤン・ゴンによって、特にヨーロッパとアジア間の現代アートと文化の交流を促進するために2017年にロンドンに設立された。この目的のために、Troy house artは現在、中国とイギリスの4カ所に広がるマルチメディア・プラットフォームとなっている。これらのプラットフォームは、パンデミック後の世界の変容した文化的・社会的環境に対応し、美的・環境的リサーチと、これらの変化する状況を反映する実験的アート、写真、ビデオ、フィルムの制作をサポートしている。トロイハウス｜アジア各地のタイムベース／デジタル現代美術のコレクションもまた、同じ路線で成長を続けている。

The Troy House Art Foundation was established in London in 2017 by Shanghai-born artist and producer Yuan Gong to encourage exchanges in contemporary art and culture, particularly between Europe and Asia. To this end, Troy house | art is a multimedia platform currently spread across four locations in China and Great Britain. Responding to the transformed cultural and social environment of the post-pandemic world, these platforms support aesthetic and environmental research and the production of experimental art, photography, video, and film that both reflect and comment on these changing circumstances. The Troy House | Collection of contemporary time-based/digital art from different parts of Asia will also continue to grow along the same lines.

troyhouseart.org

TROY HOUSE

Residency Programme(Curator)
招へいプログラム（キュレーター）

グエン・アン・トゥアン
Nguyen Anh Tuan
Heritage Space アーティスティック・ディレクター　artistic director of Heritage Space

ハノイ美術大学で芸術理論と芸術史を学ぶ。2002年から2015年までハノイ芸術大学で美術研究員、2012年から2016年までムオン・スタジオのアーティスト・イン・レジデンス・プログラムであるムオンAIRのマネージャーとして勤務。
ベトナムやアジア地域の文化的・政治的状況によって異なる場所や状況において、美術の制作における表現の多様性やその可能性を見出すことに焦点を当てたプロジェクトや活動を行う。
2016年からは、ベトナム・ハノイの民間アートスペースHeritage Spaceのアーティスティック・ディレクターを務める。また、2018年よりメコンデルタ諸国の文化セクターにおけるネットワークMekong Cultural Hubs、そして、ブリティッシュカウンシル・ベトナムと、ブリティッシュカウンシルと欧州連合の共同出資によるVICASが実施するCultural Creative Hubsプロジェクト（2018－2021）にも参加。

Nguyen Anh-Tuan graduated from the Hanoi Fine Arts University with a major in Theory & History of Arts.
His projects and activities focus on discovering the diversity of expression in art creation, and its possibilities to be explored in different locations and circumstance covered by specific cultural and political situations in Vietnam and Asian region.
Since 2016, Tuan has been working as artistic director of Heritage Space, an independent art space in Hanoi, Vietnam. Tuan is also a member of Mekong Cultural Hubs – the network of cultural sectors in Mekong Delta countries since 2018, and member of the Cultural Creative Hubs project (2018 – 2021) implemented by British Council Vietnam and VICAS, co-sponsored by British Council and European Union.

Residency, A Model for Art Production and Circulation After COVID-19

コロナ禍以降のアート制作・発表モデルとしてのレジデンス

全編 /Full Version

この文章はウェブサイトに掲載の完全版を短く編集したものです。完全版はNPO法人S-AIRのHPにてご覧いただけます。
The full version of the text can be read on S-AIR Website or scan the QR Code:

日本語 Japanese　英語 English

NPO法人S-AIRは、日本で長く国際的なレジデンスプログラムを継続している美術系団体のひとつで、コロナ禍ではプログラムをオンラインで実施することにより、活動を休止することなく継続してきた。S-AIRのプログラムで興味深い点は、レジデンスのタイプが「アーティストプログラム」と「キュレータープログラム」の2つに分かれていることであろう。アーティストプログラムは、「アーティスト － スタジオ － 展示 － コミュニティの交流」という標準的なモデルが容易に想像つくことと思う。一方、キュレータープログラムには、短期と長期の目標があり、このモデルでは2つの大きな要素がある。1つは、滞在中に特定のテーマや目標に焦点を当てたリサーチの必要性で、もう1つは、将来に向けた長期的な協力やつながりの機会を考えながら、幅広い交流を生み出すことである。アーティストは滞在中に体験したことや置かれた環境に呼応して作品を制作するが、キュレーターは滞在先のアートシーンを自分の地元のアートシーンと重ね合わせ、その場所との交流を生み出すことを考えるのである。初めての地域と連携し充実した交流を通して多面的な効果をあげるためには、その場所でどのように文化が生まれ育まれているか、その仕組みを理解し、把握することが重要である。キュレーターが現代アートの「門番」であるとすれば、キュレーター・イン・レジデンスは門と入口をつなぎ、強固で効果的かつ持続的な「アートの交通システム」を構築する存在であると言えよう。

北海道で訪れた博物館は、ウポポイ国立アイヌ民族博物館と北海道博物館。私にとって、土地の物質的生活や社会生活の形成の歴史を理解することは非常に重要だ。これらの博物館では、入植者が持ち込んだ様式と外国から取り入れた様式がわかるように地元の建造物が展示され、歴史が明確にそしてわかりやすく保存されている様子がわかった。北海道開拓の村では、学芸員と文化の盗用や文化の継承、そして多様な文化や人種が共生する国で起こりがちなことだが、自分たちの文化について話す権利を奪われ、疎外されたコミュニティの事例など、非常に興味深い議論を交わした。ウポポイ国立アイヌ民族博物館では、アイヌ民族の歴史、生活、風習、習慣、信仰、現代文化など、アイヌ文化が近代的かつ幅広く、比較的に全体を網羅する形で紹介されている。アイヌ文化史を幅広く公に伝えるという意味だけでなく、現代のアイヌ社会の豊かなリソースや統合能力、社会的関連性を明らかにするという意味でも、包括的な展示を実現していると言えよう。 全体的に、北海道の文化的歴史博物館のシステムは、欧米の機関に完全に匹敵する高い水準にある。

博物館以外には、私はハノイにあるベトナム美術大学で10年以上教えていたこともあり、芸術教育にも興味がある。札幌市立大学では、講師でデザイナーの須之内元洋氏、北海道教育大学では、教授でアーティストの伊藤隆介氏と同じく教授でS-AIRの代表でもある柴田尚氏を訪ねた。いずれも、ベトナムの芸術教育機関と比べると、物理的基盤が完璧であり、環境もはるかに整っていることがわかる。しかし、カリキュラムに関して言うと、ベトナムと日本の芸術教育には共通点があることに気づかされる。芸術教育は常に固定観念や教育学に縛られがちで、学内で実践的な発展や実験を支援する余地はほとんどない。そのことからも、札幌のS-AIRやハノイのHeritage Space（ヘリテージ・スペース）のような独立系美術団体は、芸術を学ぶ学生や若いアーティストが新しいことを経験する場や、将来の活動に向けてネットワークを作る国際交流の場など、学校の環境ではなかなか得られない機会を提供する重要な役割を担っていることがわかる。

教育システムと並ぶ私のもう一つの関心は、美術組織やアーティストのスタジオ、アーティスト主導のプロジェクトなどの民間・独立系システムにある。それらは、ポジティブな新しいエネルギーを生み出し、新しい創造が育まれ、形になる瞬間を後押しする場所である。さらにそこから、教育制度に活力を与え、新しい芸術・文化の価値を形成する場所でもある。また、幅広いスケールとレベルの国際交流の場でもあり、非常に柔軟で機動的、かつ低コストである。教育制度が地域文化とアイデンティティの骨格と基盤を形成しているとすれば、アーティスト個人や独立組織は、その文化体系を動かすエネルギーと血管、エンジンなのである。

その土地の芸術文化の仕組みを深く理解するためには、中・長期的な滞在が必要であり、それを可能にするのがレジデンスプログラムである。レジデンシーは、現在もなお、そして将来にわたり多くのポジティブな効果を生み出す活動であり、文化交流モデルのひとつであろう。しかし、新しいモチベーションやエネルギー、文化・芸術的経験の深さを生み出すために、常に新たな運営・活動方法を模索し続ける必要がある。もし、従来の方法に従うだけならば、交流の価値は曖昧で形式的になり、発展や影響を生み出すことが不可能になってしまう。これは、私とアーティストの伊藤隆介氏が、日本やベトナム、その他多くの国のレジデンスプログラムを比較する際に議論し、意見を同じくする点である。S-AIRが、北海道を訪れるアーティストにとって、最も信頼できる重要な目的地のひとつであり続けるために、さらなる進化を遂げることを願っている。

S-AIR is one of the long-established organisations that runs international artist-in-residence programmes. They continued their programme throughout the pandemic by moving online. One interesting aspect of S-AIR's residency programme is that it offers two types of residency: for artists and curators. Their programme for artists follows the familiar format of artist-studio-exhibition-community exchange and their curatorial residency has both short and long-term goals, focusing on research on a specific topic or a specific objective during the stay, creating diverse exchanges with the aim of future long-term collaborative opportunities. The resident artist produces work reflecting their experience and surroundings, whilst curators can observe the local arts scene reflecting on the ones they are familiar with. It is essential to understand the local cultural production process is key to designing a fruitful and collaborative project achieving a diverse impact. If curators are seen as the "gatekeepers" of today's contemporary art world, then the curatorial residency programme aims to link those gates and entrances, establishing a robust, efficient, and enduring 'art traffic system'.
During my stay in Sapporo, my goal was to understand the local art scene and the process of nurturing, operating and producing cultural factors for the region. To achieve this, I explored various institutions and locations with distinct roles, functions, and scales, including museums, universities, public art installations, galleries, independent art spaces, groups/collectives, and artist studios.
The museums I visited were the Upopoy National Ainu Museum and the Hokkaido Museum. These visits were very important for me so that I could understand the history and the formation of the material and the social life of Hokkaido. Here, I observed how history has been preserved in a clear and simple manner by displaying various forms of local architecture that showcase both colonial and foreign-influenced designs. We had a fascinating conversation with a curator at the Historical Village of Hokkaido about cultural appropriation, cultural heritage, and the marginalisation of communities who were denied the opportunity to speak about their own culture. This is a common issue in countries with diverse cultures and ethnicities. The Upopoy National Ainu Museum is a modern, massive, and relatively complete display of Ainu culture, including their history, daily life, customs, practices, beliefs, and contemporary culture. Not only does the museum provide a comprehensive public display of Ainu cultural history, but it also reveals a rich resource of the contemporary Ainu community and their ability to integrate their status in current social associations. Overall, the cultural history museum system in Hokkaido is of high standard, comparable to European and American institutes.
In addition to museums, I have always been interested in art education because I taught at the Vietnam University of Fine Arts in Hanoi for over ten years. I had a chance to visit Sapporo City University to meet designer and lecturer Motohiro Sunouchi, and the Hokkaido University of Education to meet artist and professor Ryusuke Ito and professor and director of S-AIR, Hisashi Shibata.
Both institutions have better facilities and a better foundation than art training institutions in Vietnam. However, when discussing the curriculum, I noticed similarities in art education between Vietnam and Japan. Art education always faces stereotypes and pedagogy and has little room to support breakthroughs or

experimentation within the confines of the classroom.
Independent art organisations, such as S-AIR in Sapporo or Heritage Space in Hanoi, play an important role in providing places for art students and artists to experience new things and opportunities for international exchanges, which they might not find within the school system.
These organisations help build networks for potential work in the future.
Alongside the academic system, my second biggest concern is the private/independent system, such as art organisations, artist studios, and artist-run projects. These are the places that create positive new energy and encourage the momentum from which creativity is nurtured and materialised, thereby energising the education system and forming new aesthetics and cultural values. They are also places for creating international exchange on many levels, from small, medium to large scale, that are very flexible, mobile, and low-cost.
If we consider the educational system as the backbone and foundation of local culture and identity, creative individuals and independent organisations are the energy, blood vessels, and engines that operate that cultural body.
To truly comprehend how arts and culture function in a specific location, extended stays are necessary, which can be facilitated through residency programmes. Residencies are an effective way to create immediate and future positive impacts through cultural exchange. However, it is important to continuously introduce new methods to enhance the depth and energy of cultural and artistic experiences, rather than relying solely on existing models. This is the view, which artist Ryusuke Ito and I have in common when we discussed various residency programmes in Japan, Vietnam and other countries. Hopefully, S-AIR will continue to evolve and remain one of the most dependable and significant destinations for artists visiting Hokkaido.

連携団体　Partner Organisation

Heritage Space

2014年にベトナム・ハノイ市に設立されたヘリテージスペースは、美術展やプロジェクト、図書館、音楽コンサートやパフォーマンス、教育や交流プログラムなど、多くの学際的な活動のための独立アートスペース。アートマネージャーとキュレーターのチームによって運営されるHeritage Spaceは、国内外の幅広いクリエイティブ分野の個人・グループ・団体のためのプラットフォームとなることを目指しており、ベトナムの現代アートと文化の発展を支援し貢献することを長期目標としています。

Established in 2014, Heritage Space is an independent art space based in Hanoi, Vietnam. The space offers various interdisciplinary activities, including art exhibitions and projects, a library, music concerts and performances, education and exchange programmes, and other diverse events. The venue is run by a team of art managers and curators and aims to become a platform for individuals, groups, and organisations from a wide range of local and international creative fields. Its long-term goal is to support and contribute to the development of contemporary art and culture in Vietnam.

heritagespace.com.vn

HERITAGE SPACE

Oversea Programme

派遣プログラム

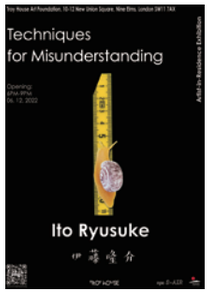
連携先であるTroy House Art Foundation（イギリス）は、ウェールズに新しいレジデンスの拠点を設立。札幌からは、進藤冬華と伊藤隆介を派遣し、ウェールズとロンドンを中心にリサーチや滞在制作を行い、成果発表は同団体のロンドンにあるスペースで発表した。

Sapporo based artists Fuyuka Shindo and Ryusuke Ito took part in a new residency programme at Troy House Wales, which was established by our partner Troy House Art Foundation. They had an opportunity to do research, meet people and visit places in and around Monmouth and London, and had an exhibition at the end of their stay in London.

グレイトブリテン・ササカワ財団

派遣作家報告会
2022.12.22 ㊍ 19:00－21:00

会場
なえぼのアートスタジオ等、0地点



Evolving Cultural Landscapes

進化し続ける文化的景色

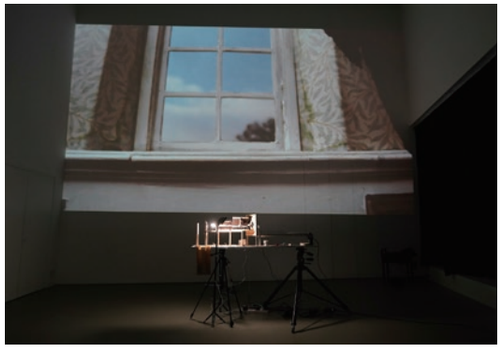
橘匡子
特定非営利活動法人S-AIR プログラム・ディレクター
Kyoko Tachibana
NPO S-AIR, Programme Director

当団体が日本人アーティストを海外の連携先へ派遣を始めたのは、2006年に遡る。日本における国際レジデンスプログラムは、文化交流的な要素が強いが、パンデミックによりオンラインである程度のコンテンツは簡単に発信することができるようになった分、改めてどのようなプログラムやサポートを提供すべきかを考えさせられた団体も多いのではないだろうか。

2018年から交流していた中国のPoints Centre for Contemporary Artの母体となるトロイハウス芸術財団が英国に新設した拠点への日本人アーティストの派遣は、2年越しで実現した。日本とは対照的に、イギリスは海外からの対内直接投資に積極的であるが、美術分野において、しかも首都ロンドンではなくウェールズの小さな町モンマスに、中国の団体がどのような拠点を築くのか、そして同じ東アジアの団体としてどのように関わることができるか、最初の一歩に関わることができる機会でもあった。

トロイハウス・ウェールズ　Troy House Wales

進藤冬華「私が自転車のパーツを集める理由とこれら大工道具が好きな理由は同じ」トロイハウス・ロンドンでの展示風景（2022年）
Fuyuka Shindo: I Collect Bicycle Parts for the Same Reason I like These Assembled Handmade Tools and Objects, Troy House London (2022)


伊藤隆介「勘違いの技法」トロイハウス・ロンドンでの展示風景（2022年）
Ryusuke Ito: Techniques of Misunderstanding, Troy House London (2022)

古代ローマ時代からモンマスは地理的そして軍事的に重要な町となり、11世紀にはイングランドからノルマン人が侵略する拠点となるなど、ウェールズへの入り口として重要な役割を果たしてきた。現在では、イングランドの大きな町へのアクセスも良く、ワイ渓谷の美しい風景に囲まれた住みやすい町として、魅力的な移住先でもある。外国の資本による新たなレジデンスプログラムに派遣元として関わることで、滞在制作における受け入れ側のあり方を、改めて客観的に考えることができた。

白紙の状態から、受け入れ側、派遣元、参加アーティストなどの立場を超えて、互いの持つ文化、経験、知識を持ち寄り、よそ者同士でその土地と繋がろうと共に探るような作業となり、この方法には多くの可能性があるように感じた。そしてそれは、常に移住者により歴史やアイデンティティが塗り替えられてきたイギリスという社会を反映しているようにも感じた。

Back in 2006, S-AIR started sending Japanese artists on residencies with our overseas partners. Most international residency programmes in Japan have a strong element of cultural exchange and many organisations had to switch their programmes online during the pandemic. Whilst it became much easier to create and show their ‘outcomes’ online without geographical restrictions, many organisations were forced to reconsider what kind of programming and support they should be offering.
Troy House Art Foundation, the parent organisation of the Points Centre for Contemporary Art in China, with whom we had been working with since 2018, established a new residency programme in the UK. After two years of the pandemic, we finally achieved an in-person exchange programme this year. Unlike Japan, Britain is much more open to direct investment from overseas, we were curious to find out how an East Asian art organisation would integrate into the historic town of Monmouth, which is not a cosmopolitan city like London. It was an honour to be involved as a partner organisation and as a fellow outsider.
Monmouth has been a geographically and strategically important town since Roman times as a gateway to invade Wales from England. Due to its easy access to larger towns in England and being surrounded by the scenic landscape of Wye Valley, Monmouth nowadays is an attractive place to live. Being involved as a partner in the development of a new residency programme enabled us to think objectively on what we can offer to artists and communities.
Starting with a blank slate, whether we were from Japan or China, artists or hosts, we worked collaboratively bringing together each other’s cultures, experiences and knowledge, exploring together to make connections with the locals. It feels like this approach could open numerous possibilities and this essentially reflects Britain, whose history and identity have always been reshaped by waves of migrants.

Oversea Programme
派遣プログラム

進藤冬華 *Fuyuka Shindo*

美術作家 Artist

歴史と共に過ごす

Living Together with History

月並みかもしれないが、イギリスに滞在中は行く先々で各地の歴史に目がいき、それらが顕在化している環境に感嘆しながら日々を過ごした。滞在先のトロイハウス、ウエールズのモンマスの街並み、リサーチで訪れたさまざまな庭園など、どこに行っても人々は何百年もの長い歴史と共に当然のように暮らしていた。例えば、トロイハウスの建物の壁面を見ると、17世紀に建てた当初のところから時を経て何度も増改築を繰り返した箇所を、積んである石やレンガ、さらにはその種類などから追うことができ、新しいところだと1960年代のものもあった。こうして、つぎはぎの壁が建物の歴史の一部になっている。また、ある庭園のガーデナーの話によると、木々の種類や樹齢から場所の歴史を知ることもできるそうだ。このように人から人へ引き継ぎ、現在、さらに未来に残そうとする膨大なエネルギー、その責任と精神は建物や庭園に限らずさまざまな物事に息づいているようだった。一方で、いつでもどこでもついて回る歴史から逃れられない窮屈さも私は感じた。

ロンドン北西部ヘッドストーン・マナーハウス博物館。この一帯地域で現存する最も古い農業建築が保存されている。14世紀の建物に17、18世紀に増築された部分が混在する。
Headstone Manor House Museum, London

こうした環境にいながら、これまでに訪れた国内外のいろいろな場所の中で、歴史が見えない場所、遺構や遺跡が打ち捨てられたままになっていた場所が思い出された。日々膨大な過去の遺物を目にしながら過ごしていると、これまで訪れた全ての場所に人や自然の濃厚な営みと膨大な積み重ねがあることに今更ながら気付かされる。たとえ歴史が見えにくく、詳細は既にわからなくなっている場所だとしても、同様に時間は流れてきたのだから。

レッドヒル・ヒマラヤン・ガーデンズの主任ガーデナーの笠原みさこ氏に、同庭園の案内やイギリスのガーデニングについて話を伺う。
Meeting head gardener Misako Kasahara, Red Hill Himalayan Gardens, Kent.

ウェールズのナショナル・サイクル博物館
National Cycle Museum, Wales

It may sound like a cliché, but during my stay in England, I couldn't help but notice the rich history displayed in every place I visited. Whether it was Troy House, where I stayed, the streets of Monmouth in Wales, or the various gardens I visited, I found myself surrounded by centuries of history wherever I went. People were living amongst the remnants of hundreds of years of history, and I spent my days admiring the environment in which it was showcased. For example, at Troy House, one could easily trace the building's history by examining its walls. The original structure dates back to the 17th century, but over the years, it has been renovated and extended numerous times. By observing the piled-up stones and bricks, and even the types of materials used, you could see the various periods of construction. Some of the newer parts were from the 1960s, creating a patchwork of historical elements within the walls. Similarly, a gardener I spoke with explained that a place's history could be detected by the types and ages of its trees. This made me realise that the energy and spirit of the people who built these structures and tended to these gardens have been passed down from generation to generation. It was evident in everything around me, not just the buildings and gardens. On the other hand, I also felt the constraint of being unable to escape from the history that follows us everywhere.
Whilst in this environment, I recollected various places I had visited in Japan and other countries where history was not easily visible and areas where relics and ruins had been left abandoned. As I spent my days looking at the vast amount of remains from the past, I realised somewhat belatedly that all the places I had visited thus far had a history of abundant activities and an accumulated history of people and nature. Even if it is a place where the history may be hard to see and the details are already obscure, time flowed just as it does now.

札幌を拠点として活動を行うアーティスト、郷土史又は歴史に中の特定の出来事に対峙する方法としてフィールドワークを中心としたリサーチ行い、その体験をベースに作品を制作してきた。こうして歴史や過去の出来事に関わる中で、近年はとう記録や記憶、アーカイブや言い伝えなとが残るのか、また一方で観客が作品やイベントをとういった形で体験、目撃するのかにも興味を持っている。
2016年アジアン・カルチャラル・カウンシルのグラントによりニューヨーク滞在、「六本木クロッシング2022」(森美術館、東京)なと国内外のさまざまな美術プログラムに参加。

Based in Sapporo, Japan, Fuyuka Shindo has been producing work based on her fieldwork as a way of confronting specific events in local as well as national history of Japan. In recent years, she has become interested in how history has been preserved, for example, in monuments, remains and ruins, as well as in archives and oral traditions. In her practice, she explores the ways in which audiences experience and witness artworks and events. In 2016, she was awarded an Asian Cultural Council grant to stay in New York and has participated in various art projects in Japan and internationally. Her work is currently shown as part of Roppongi Crossing 2022 (Mori Art Museum, Tokyo).

www.shindofuyuka.com/

スコットランド・ビュート島のマウント・スチュアート。かつてのスコットランド王室と血縁の貴族が所有する。
Meeting head gardener Misako Kasahara, Red Hill Himalayan Gardens, Kent.

モンマスでのレメンブランス・デー
(第一次世界大戦終結記念日)のようす
Remembrance Day, Monmouth, Wales

ウェールズ・ニューポートの墓地
Cemetery in New Port, Wales

Oversea Programme
派遣プログラム

伊藤隆介 Ryusuke Ito

美術・映像作家 Visual Artist, Filmmaker

さまよえるアジア人 The Flying Asianmen

トロイハウス・ロンドンにて搬入中
Installing work at Troy House London

モンマスでの一ヶ月のレジデンスは、日本とは異なり人が整備してきた自然の風景、時間が堆積したトロイハウス、人間より多い動物たちとの交流など、普段の環境とはかけ離れた生活を通し、自身の有り様に向かい合う貴重な機会を得た。ウェールズの首都・カーディフなど地方都市の、政治や経済、文化の中央集権化、グローバル化に疲弊した様相に共感したり、史跡等に散見する統治者とウェールズの文化の相剋と共存（長く差別されてきたウェールズ語が公用語として英語との並記などの復権を果たした）に、自分が住む北海道の未来に思いを馳せた。

大きな収穫は、Troy House Foundationと主宰者Yuan Gong氏の国際的な立ち位置と、活動そのものを知ったことだ。母国の政治体制との対立から海外で活動せざるを得ない彼らとは、日本では容易に語られながら実践は稀な、「表現の自由」や「人権擁護」への殉教である。今も昔も若い世代にとって欧米諸国でのレジデンスは、白人中心の美術界や市場でのキャリア・メイキングの訓練ともなろうが、そんな青春期もとうに過ぎた自分にとって、属した国家体制は違えども、文革から天安門事件、コロナ禍まで同時代の記憶を共有する極東の同胞の、他文化における苦闘としたたかな戦略を垣間見られたのは大きい。黄昏と言われながらまだまだしぶとい西欧社会に、本気のアジア人が向き合う行動への共感により、僅かながらも当事者性を共有することとなった。国際レジデンス事業は初めてのスタッフたちと、手探りで展覧会を完成させたのも楽しかった。

言わば、今回の滞在制作は、女子高校生アイドル崇拝からエマージング・アーティスト支援まで、病的とも言える日本社会の成熟忌避から、リアルに戦う世界へのリブート＝生き直す体験だった。その醍醐味を与えてくれた関係者一同に深く感謝したい。

My one-month residency in Monmouth was different from life in Japan far removed from my usual environment such as the natural scenery well maintained by the locals, Troy House where time quietly passed by, where my interactions with the animals far outnumbered those with humans, and I was given a precious opportunity to have an introspection with myself. I found myself empathising with the centralisation of politics, economy and culture in local cities such as Cardiff, the capital of Wales, the exhausted veneer of globalisation, and the conflict and coexistence between those in power and the Welsh culture that can be seen in the historic sites (Welsh, which has been discriminated against for a long time, has been reinstated as an official language, such as being listed alongside English), making me think about the future of Hokkaido, where I live.
The biggest eye-opener was finding out about the international position of the Troy House Art Foundation and its founder, Mr. Yuan Gong, and about the activities themselves. For people who have no choice but to conduct their activities overseas due to coming into conflict with the political system of their home country, their cause is the “freedom of expression” and “protection of human rights”, which are often casually talked about in Japan but rarely put into actual practice. For younger generations, both now and in the past, residencies in Europe and the United States have served as training for career-making in the art world and market, which are dominated by white people, but as for me, having long passed such youth, being able to catch a glimpse of the struggles and tough strategies in other cultures of my compatriots in the Far East, who share the memories of the same era from the Cultural Revolution to the Tiananmen Incident and the Covid pandemic, was hugely significant despite the fact we belong to different political systems. Through sympathising with the actions of these authentic and determined Asians facing Western society, which is said to be in its twilight years but is still intractable, I too came to share a sense of participation, albeit as a minor player. I also enjoyed organising the exhibition with my on-the-spot efforts together with the staff members, who were new to the international residency program.
Safe to say, this residency was a first-hand experience of rebooting (reviving) from a life of idolising young celebrities to supporting emerging artists, and from a pathological avoidance of maturity in Japanese society to a world where real fighting takes place. It is with profound gratitude that I extend my thanks to all the people involved who gave me the opportunity to experience this real essence.

カーディフ近郊にあるセント・ライサンズ新石器時代の支石墓
St Lythans Burial Chamber, Wales

カーディフのアーティストスタジオを訪問
Butetown Artists Space, Cardiff, Wales

映像作家・美術作家。映像メディアの物質的な特性をテーマに、映画フィルムを産業的廃材としてコラージュ・モンタージュする実験映画のシリーズ、ミニチュア・セットと撮影映像を並置、比較するビデオ・インスタレーション”Realistic Virturality”シリーズ、近年は映像とその支持体を雑貨や家具と組み合わせる立体作品などを制作している。近年の発表は、個展「Domestic Affairs」（2020年、児玉画廊｜天王洲／東京）、「天神洋画劇場」（2016年、三菱地所アルティアム／福岡）など。

Ryusuke Ito is a Japanese artist and experimental filmmaker who explores the materiality of moving images and their function as a communication system. He creates a series of video installations called "Realistic Virtuality," where he uses detailed miniature sets to symbolize aspects of modern life, such as a food court in a shopping mall, a flying drone, and the ruin of a nuclear plant. These are captured on camera, and the images are projected onto a wall, juxtaposing them with what the camera is capturing. Ito's work highlights the structures of video as a medium and questions the credibility of visual media today, such as movies, TV, and social media. He's also known as Kenji Murasame, a Japanese manga critic who's been contributing to papers and magazines since the 1980s.

www.ne.jp/asahi/r/ito/

関係者一同と記念撮影
With staff members and associates

オープニングにて
Private view of the exhibition, Troy House

Wall Art Project & Open Studio

ウォールアートプロジェクト＆協働オープンスタジオ

なえぼのアートスタジオ ／ *naebono art studio*

札幌市中央区北2東15　*https://www.naebono.com*

Wall Art Project
ウォールアートプロジェクト

なえぼのアートスタジオと0地点
それぞれの外壁を舞台に、
作品を制作し発表するプロジェクト。

One artist each from naebono art studio and Zero Chiten produced and presented their work on the exterior wall of each building.

ウォールアートプロジェクト参加作家
なえぼのアートスタジオ／大橋鉄郎

制作期間
2022.9月後半 – 10.4

展示期間
2022.10.4 ㊋ – 10.10 ㊗・㊊

『無題』大橋鉄郎　“Untitled” Tetsuro Ohashi, 2022

Open Studio
協働オープンスタジオ

苗穂地区の共同アトリエ、
なえぼのアートスタジオ＋
0地点による初の同時開催イベント。

First collaborative open studio at naebono art studio and Zero Chiten, two artist-run studios based in Naebo area.

参加作家 / Participating Artists

今村育子+高橋喜代史 ❸
Ikuko Imamura + Kiyoshi Takahashi

風間天心 ❿
Tengshing Kazama

川上大雅 (TAIGA KAWAKAMI, salon cojica) ❶
Taiga Kawakami (TAIGA KAWAKAMI, salon cojica)

川村正寿 ❽
Seiju Kawamura

小里純子 ❼
Junko Kosato

小林知世 ❹
Chisei Kobayashi

進藤冬華 ⓫
Fuyuka Shindo

武田浩志 ❷
Hiroshi Takeda

西田卓司 ❻
Takuji Nishita

山内太陽 ❾
Taiyo Yamauchi

山本雄基 ❺
Yuki Yamamoto

レジデントによるギャラリートーク
2022.10.8 ㊏ 18:30 –

交流パーティー
2022.10.8 ㊏ 19:00 –

❶

About Naebono Art Studio

なえぼのアートスタジオについて

今村育子
美術作家／札幌駅前通まちづくり株式会社
Ikuko Imamura
Artist, Sapporo Ekimae-dori Urban Development Co., Ltd.

なえぼのアートスタジオは2017年に発足した集合アトリエです。まちづくりとアートを学ぶ「シンクスクール」の卒業生で元不動産業の荒岡信孝さんが、スタジオを探していた同スクール講師の画家の山本雄基さんに物件を紹介したことがきっかけで誕生しました。大昔は缶詰収納倉庫だった築60年2フロア約270坪の大きな空間に、アーティストの制作スタジオをはじめ、NPO法人S-AIRやギャラリーサロンコジカなど、現代美術の領域で活動する15組が入居しています。

一階には大きなフリースペースと休憩スペースがあり、フリースペースは入居者が大型作品の制作で使用するほか、展覧会やトークイベントを行うなど、フレキシブルな活用が可能な場として、また休憩スペースは、制作の相談や交流会・プレゼン会を行うなど、制作以外の様々な関係を築く場として機能しています。

運営は、最初に契約した7組が運営メンバーとなり仕組みを考え、荒岡さんが管理人となり家賃の取りまとめや修繕の手配を行なっています。集合アトリエに管理人がいるケースは珍しく、この仕組みが運営を円滑にしているとも言えるでしょう。

なえぼのアートスタジオはコレクティブではありませんが、入居する様々な年代や属性の異なる考えや表現を尊重する新しい共同体を目指しています。

❷

❸

❹

❺

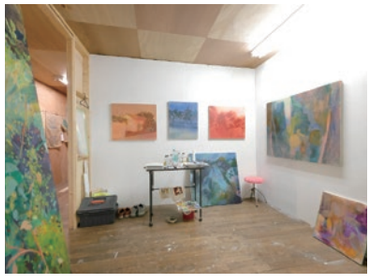
❻

naebono art studio was established in 2017 as an artist-run studio. It came into being when Nobutaka Araoka, a former real estate agent and alumnus of the Think School, where he studied urban development and art, introduced a property to Yuki Yamamoto, a painter and lecturer at the same school, who was looking for a studio. Fifteen groups involved in the field of contemporary art, including artists' studios, the NPO S-AIR, and gallery salon cojika, have moved into this 60-year-old, two-storey, approximately 890m2 space that was once used as a warehouse to store canned goods.

There is a large free space and rest space on the ground floor. The free space is available for flexible use by the residents for such purposes as creating large-scale works or holding exhibitions and talk events while the communal area functions as a place not for production, but as a venue to build various relationships, such as through holding production advice sessions, networking events and presentations.

When it comes to management, the seven groups that originally signed the contract are the committee members and they are the ones who would come up with the setup, while Araoka acts as the caretaker collecting the rent and maintaining the building. Having a caretaker is unusual for an artist-run space, but it helps to ensure smooth operation. Naebono Art Studio is not a "collective" as such, but aims to be a new community that respects the different ideas and expressions of the various ages and attributes of its residents.

❼



❽

❾

❿

⓫

今村育子
人と人、人と物などの「間（あいだ）」についての関心から、明るい部屋から暗い部屋へ滲みでる光、ドアの隙間から漏れる光、暗い部屋に差し込む一筋の光など、相対する関係の間に発生する光のグラデーションをモチーフにインスタレーション作品を制作し、2006年より国内外で展示を行う。2011年より札幌駅前通まちづくり株式会社へ入社し、主に「シンクスクール」「テラス計画」「パラレルミュージアム」などの企画を担当する。

Ikuko Imamura
Imamura's artistic practice focuses on the "space between" people and objects, using light gradations as a motif to explore opposing relationships. Her installations often depict light seeping from bright to dark spaces, light leaking through gaps, and rays of light shining into darkness. She has been exhibiting her works in Japan and internationally since 2006. In 2011, she joined Sapporo Ekimae-dori Urban Development Co., Ltd., where she is primarily responsible for planning projects such as the Think School, Terrace Project, and Parallel Museum.

運営メンバー	Committee members
今村育子 ＋ 高橋喜代史	Ikuko Imamura + Kiyoshi Takahashi
風間天心	Tengshing Kazama
川上大雅（TAIGA KAWAKAMI, salon cojica）	Taiga Kawakami (TAIGA KAWAKAMI, salon cojica)
進藤冬華 ＋ 長谷川裕恭	Fuyuka Shindo + Hiroyasu Hasegawa
武田浩志 ＋ 樫見菜々子	Hiroshi Takeda + Nanako Kashimi
西田卓司	Takuji Nishita
山本雄基	Yuki Yamamoto

入居者	Tenants
大橋鉄郎	Tetsuro Ohashi
川村正寿	Seiju Kawamura
笠見康大	Yasuhiro Kasami
小里純子	Junko Kosato
小林知世	Chisei Kobayashi
山内太陽	Taiyo Yamauchi
NPO 法人 S-AIR	NPO S-AIR

管理人	Manager
荒岡信孝	Nobutaka Araoka

Wall Art Project & Open Studio

ウォールアートプロジェクト＆協働オープンスタジオ

0地点 / *Zero Chiten*

札幌市中央区北1東11　*https://www.facebook.com/0chiten/*

Wall Art Project
ウォールアートプロジェクト

なえぼのアートスタジオと0地点
それぞれの外壁を舞台に、
作品を制作し発表するプロジェクト。

One artist each from naebono art studio and Zero Chiten produced and presented their work on the exterior wall of each building.

参加作家
櫻田竜介・堀江理人

取材協力
杉本哲朗（真照寺）、山本リョウコ

展示設計協力
山田大輝

制作期間
2022.9月後半－10.4

展示期間
2022.10.4 ㊋－10.10 ㊗・㊊

What the “Naebo Wall” tells us

『苗穂の壁』が語るもの

櫻田竜介
美術作家
Ryusuke Sakurada
Artist

2022年10月4日、北1条雁来通に面した一軒の木造民家の外壁に、祖母が赤子を抱きかかえるモノクロ写真が現れた。0地点のメンバーである堀江理人と筆者が共同制作した本作は、札幌拠点の若手アーティストがスタジオにしている築96年の古民家に展示されたものだ。

建物の歴史を紐解くと、ここは元々「紺野」家が暮らす住まいであった。大家の山本リョウコさんの母カツミさんはこの家で助産婦として仕事をし、娘アキコさんも実際に取り上げた。また、祖母のサヨさんは新聞にも掲載されるほど当時では珍しい長寿で、長きに渡りこの地を見守ってきた人だ。つまり、この写真は、サヨさんとアキコさんという4世代の歴史と、かつてこの家で撮られた紺野家の記憶なのだ。

また、家の周りに目を移すと、昭和の恐慌や終戦後の引き揚げを背景として貧民たちが掘立小屋で暮らす部落が苗穂にはあったが、札幌オリンピックを前に消え去った。0地点の家もまた、時を下ってバブル期になると高層マンション候補地として取り壊しの危機に晒されるも、のちに計画は消え去り、この地に残ったという。

そして今、この場所は再び「開発」の名のもと、多くのものが消え去られようとしている。本作はそれらに抗い、忘れるべきでない場所と人の記憶を掬いあげる試みだ。背景にそびえるタワーマンションと写真とのコントラストに道行く人々は何を思っただろうか。この試みをひとつの楔に、多様な人たちが当たり前にアートへ触れられる状況を、そして地域社会とアートとの関わり方を、この極北から考えていきたい。

『苗穂の壁』櫻田竜介・堀江理人　“Naebo Wall” Ryusuke Sakurada + Michito Horie, 2022

On 4 October 2022, a black-and-white photograph of a grandmother cradling a baby appeared on the outside wall of a wooden house facing Kita Ichi-jo Kariki Street. This work, co-produced by Michito Horie, a member of Zero Chiten, and myself was exhibited on the wall of a 96-year-old Japanese-style house that is used as working studios by young Sapporo-based artists.
Unraveling the history of the building, it was originally the residence of the Konno family. The current owner of the house, Ryoko Yamamoto’s mother Katsumi used to practice as a midwife in the very same house and even assisted in the birth of Ryoko’s daughter, Akiko. Additionally, Ryoko's grandmother, Sayo, lived a long life, which was not as common at the time, and was prominently featured in newspapers. Sayo watched over this area with great care and attention for many years. Therefore, this photograph represents the history of four generations, spanning from Sayo to Akiko, and preserves the cherished memories of the Konno family, which were created within this house.
Furthermore, upon surveying the surrounding neighbourhood, it was discovered that a buraku community previously existed in Naebo, where impoverished individuals resided in huts due to the depression during the Showa era and the repatriation period following the end of the war. However, this community disappeared before the Sapporo Olympics. The house which now stands as Zero Chiten was also at risk of demolition, as it had been earmarked as a prospective location for high-rise apartments during the period of economic boom.

Nevertheless, this proposal was ultimately discarded, allowing the house to remain in its original location.
Now, many things in this area are starting to disappear again in the name of “development”. This work is an attempt to resist such changes and cherish the memories of places and people that should not be forgotten. What do passers-by think of the contrast between the high-rise apartment buildings in the background and the photograph? Using this work as a talking point, I would like to consider this situation from the perspective of people of all ages and walks of life coming into contact with art as they go about their daily lives, and the natural connection between the local community and art.

櫻田竜介
1991年宮城県生まれ、北海道札幌市在住。美術家。視覚媒体とリアルタイムのそれぞれによる経験の差異や知覚のずれをテーマに、平面、立体、身体というメディアを行き来しながら作品制作を行う。また、アートと地域社会との接点を増やすためプロジェクトの企画も行う。アーティストランスタジオ0地点 運営メンバー

Ryusuke Sakurada
Born in Miyagi, 1991, Sakurada currently resides and works in Sapporo, Hokkaido. As an artist, Sakurada works with various media, including two-dimensional, three-dimensional and physical bodies, to explore the differences in experience and perceptual gaps between visual and real-time media. In addition to his artistic practice, he also organises art projects that involve local communities. Furthermore, Sakurada is a committee member of artist-run studio Zero Chiten.

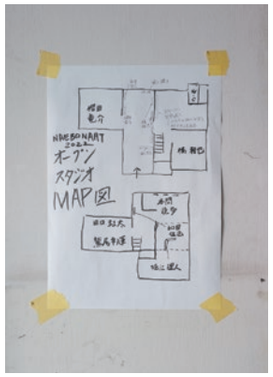
Open Studio
協働オープンスタジオ

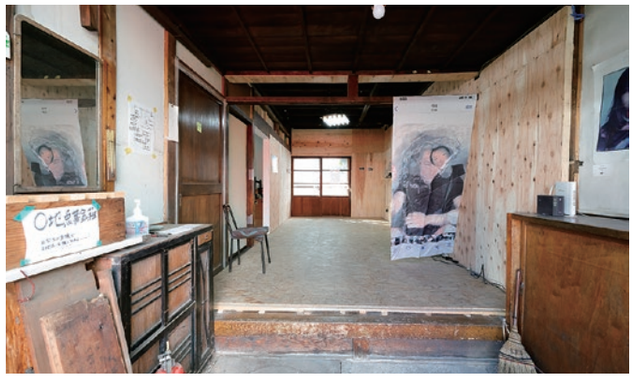
苗穂地区の共同アトリエ、
なえぼのアートスタジオ＋
0地点による初の同時開催イベント。

First collaborative open studio at naebono art studio and Zero Chiten, two artist-run studios based in Naebo area.

参加作家 / Participating Artists

櫻田竜介
Ryusuke Sakurada
田口虹太
Kota Taguchi
橘雅也
Masaya Tachibana
堀江理人
Michito Horie
本間洸多
Kota Homma
鷲尾幸輝
Koki Washio
和田佳己
Yoshiki Wada





Talks & Field Work

トークイベント＆フィールドワーク

まちづくり関係者をゲストに招き、
苗穂地区を知るための勉強会を開催。

Public programmes to learn
about the local area of Naebo.

2022.9.11 ㊐ 13:00－15:30

- 定　員：30名
- 参加費：一般1000円 学生500円

「苗穂地区のまちづくり計画」

伊藤涼祐
株式会社ノーザンクロス

「空き家活用の事例について」

荒岡信孝
有限会社リーシング・スタッフ主宰
なえぼのアートスタジオ管理人

Looking Back on 30 Years of Town Development

30年のまちづくりを振り返って

伊藤涼祐
株式会社ノーザンクロス
Ryosuke Ito
Northerncross Inc.

苗穂地区のまちづくりは、地区住民たちが根幹に持つシビック・プライドを、絶やすことなく走り続けた賜物であると思う。共通しているものは、「下町のような情緒」、「居心地の良さ」のようなものではないだろうか。街の歴史や昔ながらの街並み、人の顔が見える場づくりを大切にしているように見て取れるからだ。

最終的な目標は、中央区と東区を結ぶ新たな駅舎を呼び込むことにあり、その機運づくりとして1990年代に活動が始まった。幾度とない意見交換を行い、住民・関係企業が主体となった美化・清掃活動、街の安全を守るための取り組み、コミュニティカフェの運営などが進められた。30年に及ぶ戦いの末、夢にまで見た新駅舎は完成し、関連する開発も概ね完了しつつある。それでは、苗穂地区のまちづくりもまた、開発とともに完了したということなのだろうか？

今回のフィールドワーク後、恥ずかしそうに私に近づいてきて「コミュニティカフェのテーブルマットをもう少しオシャレにできないでしょうか？」と声をかけてくれた学生がいた。その指摘は、わざわざ残って言うわりには、かなりピンポイントなもので面白かったが、嬉しい指摘であった。実は私もそう思っていたというのも理由にあるが、「やれることがある」と確信させてくれたことが一番だった。

これからは、街に人の個性を溶かしていくフェーズだと思っている。ここ数年、苗穂で何かしたいという人が増えてきた。オシャレなカフェが先駆者で、その次に若いアーティストがやってきた。パフォーマー、デザイナーなどが興味を持っているという話も聞く。様々なキャラクターがパッチワークのように街を彩り、出会いと文化が生まれる、私はそんな未来を夢見ているし、苗穂はその個性を引き付け、受け止める街であってほしい。それは、「まちづくりの計画」というには大げさではあるけれど、先人のシビック・プライドを受け継いだ、次の30年に期待していることだ。

It seems to me that the town development of the Naebo district came about because of the civic pride that is at the core of the efforts of the residents of the district. What the residents possess in common is something akin to a downtown atmosphere and a sense of easy comfort. This is because you can see that they value the history of their town, the traditional townscape, and a form of place-making where people can easily see one another.
The ultimate goal was to gain approval for a new station building connecting Chuo Ward and Higashi Ward, and it was in the 1990s that activities first began to create momentum towards this goal. Many discussions took place, and activities were organised by the local residents and companies to help tidy and spruce up the town, efforts were made to ensure the public safety, and the promotion of community cafes began.
After 30 years of persistent back and forth, the highly anticipated new station building is complete, and the related development is almost finished. So, does this mean that the town development for the Naebo district has also reached an end along with this development?
One day, following the fieldwork, I was approached by a student who shyly asked, “Would it be possible to make the table mats for the community cafe a little bit more stylish?” Given the fact that the student had spent time and effort to stay behind to make what appeared to be a rather trivial point, I was somewhat startled but happy to have this pointed out. Truth be told, I had actually thought the same thing, but the most important thing was that it convinced me that there was something more I could do.
I think now we've reached the phase where people's individuality can be reflected in the town. In recent years, more and more people want to do something in Naebo. Stylish cafes were the starting point, followed by the presence of young artists. I also hear that performers and designers are interested in our town. Various characters colour the town like a patchwork, and encounters and culture are born here. I dream of such a future, and my hope is for Naebo to be a town that attracts and welcomes such individuality.
It may be an exaggeration to call it a “town development plan”, but I have high hopes for the next 30 years to come as we inherit the civic pride of our predecessors.

伊藤涼介
1993年生まれ。札幌出身。都市デザイナー。
都市計画・都市デザインの視点からエリアビジョン、都市戦略の検討・コーディネートの実践に携わる。
（株）ノーザンクロスに勤務。緩やかなまちづくりチーム「naeboでasobo」を設立。

Ryosuke Ito
Born in 1993, is an urban planner from Sapporo. His work involves examining and coordinates area development vision and strategies from the perspective of urban planning and design.
He works for Northerncross Inc. and has established a casual town planning team 'naebo de asobo'.

About S-AIR

S-AIRについて

NPO S-AIR 特定非営利活動法人エスエア
www.s-air.org

NPO法人S-AIRは、1999年より文化庁などの助成を受けて北海道でアーティスト・イン・レジデンス（AIR）事業を開始しました。NPO法人となった2005年度以降は、ICC（さっぽろ産業振興財団、インタークロス・クリエイティブ・センター）との共催でAIR事業を継続し、特に近年の創造拠点交流事業では、国内外のアートセンターやアーティストとのネットワークを形成しています。2011年からは新たに文化庁より助成を受け、「FRONTIER」というプログラムを開始、2016年からは「S-AIR Exchange Programme」として実施しています。今年度のレジデンス事業、またそれに関連した事業については、文化庁、札幌市、公益財団法人北海道文化財団からの助成を受けて実施しました。

アーティスト招へい事業

1999年の実行委員会設立から、2022年度終了までに計37カ国・地域から、105名のアーティスト招へい（一ヶ月以上滞在のAIR事業・プロジェクトに限る）の実績があります。
2008年度から2012年度までに実施した、東アジアクリエーター交流プログラム「JENESYSプログラム」（国際交流基金）では、アジア大洋州の国々から選出されたアーティストを5年間で計10名招へいしました。2011年度から2015年度まで実施した「FRONTIER」プログラムでは一期に2名ずつ年間4名のアーティストやキュレーターを招へい、2016年度からはS-AIR Exchange Programmeとして招へい事業を実施しています。

アーティスト派遣事業

2006年度からは札幌のアーティスト・クリエーターの支援を目的として、海外のレジデンス・プログラムへ派遣する事業「S-AIR AWARD（制作活動助成プログラム）」を開始、2011年度は地元だけでなく全国からのアーティストの選出も試み、2016年度以降は「S-AIR Exchange Programme」と題し、相互に招へいと派遣を行う交換プログラムを正式に開始。2020年度は感染症の世界的な拡大を受け、派遣事業はせず、日本と世界においてアーティストが主体となる場をつなぐオンライン・フォーラムを行いました。2022年度は再び派遣事業を復活させ、これまで24名を派遣しています。

その他の事業

過去には「アーティスト・イン・スクール03-07」（現・AISプランニング）など、コミュニティ施設や小学校などの教育現場にAIR関連事業を持ち込む、新しい形のAIR事業運営を実践。また、AIR事業とは別に、冬のモエレ沼公園を舞台としたアートイベント「SNOWSCAPE MOERE」（2005年〜2012年）や札幌大通地下ギャラリー500m美術館（2012年〜2013年）、SCARTS地下歩道の展示企画運営など、アート・プロジェクト、コンサート等、文化事業全般の企画運営も通年業務としています。2015年度からは、これまで構築してきたノウハウやネットワークを広く共有するために、レジデンス運営における人材育成を目的とした合宿型ワークショップ「AIR CAMP」を実施しました。

国内の他の多くのAIRプログラムが、事前の施設を使って事業運営を行う中、S-AIRでは、レジデントのスタジオ以外は特定の場所を保有していません。このため、レジデントのニーズ、事業ケースに応じて変幻自在に事業プロセスを構築することができ、この点はS-AIRの大きな特徴とも言えます。2020年度のパンデミックは、海外との交流事業を行ってきたAIR運営者としての新たな挑戦を受け、オンラインでの活動、海外および国内におけるアート・アクティビティの調査活動やネットワーキング、公共アートの企画やアーティストの支援を積極的に行いました。このようなプロセスを通じ、札幌における文化事業のつなぎ手として、国内外のネットワーク形成を推進してゆきたいと思います。

S-AIR was established in 1999 with partial funding by the Agency for Cultural Affairs, to run an artist-in-residence programme for Hokkaido. Since it was approved to be a non-profit organisation in 2004, S-AIR started a collaborative network with Japanese and international artists as well as art institutions in Japan and overseas. In 2011, S-AIR initiated a new programme, FRONTIER, supported by the Agency of Cultural Affairs. Since 2016, we have been operating as the S-AIR Exchange Programme. This year's residency and other associated programme were funded by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, Sapporo Cultural Arts Foundation and Hokkaido Arts Foundation

Programmes for International Artists

Since the establishment of S-AIR Committee Board, S-AIR has hosted 105 artists in total from 37 countries & regions (as of March 2023).
From 2008 for 5 years, S-AIR hosted 10 artists in total from countries in Asia and Oceania for JENESYS (Japan-East Asia Network of Exchange for Students and Youths) Programme founded by Japan Foundation.
From 2011 until 2015, we invited 3 artists and one curator each year for the FRONTIER programme. In 2016 we organised a new programme, which was re-named S-AIR Exchange programme.

Programmes for Local / National Artists

The S-AIR AWARD was set up in 2006 to offer residency opportunities to local artists to live and produce artwork abroad. In 2011, the award was also opened to non-local artists. By the end of March 2020, the award has been given to 22 artists. In 2020, S-AIR took our residency programme online to create a platform to connect communities across the world where artists take initiatives. In FY2020, in response to the global spread of infectious diseases, we did not dispatch any staff, but instead conducted an online forum to connect artist-led venues in Japan and around the world. In FY2022, the dispatch program will be reinstated, and 24 artists have been dispatched so far.

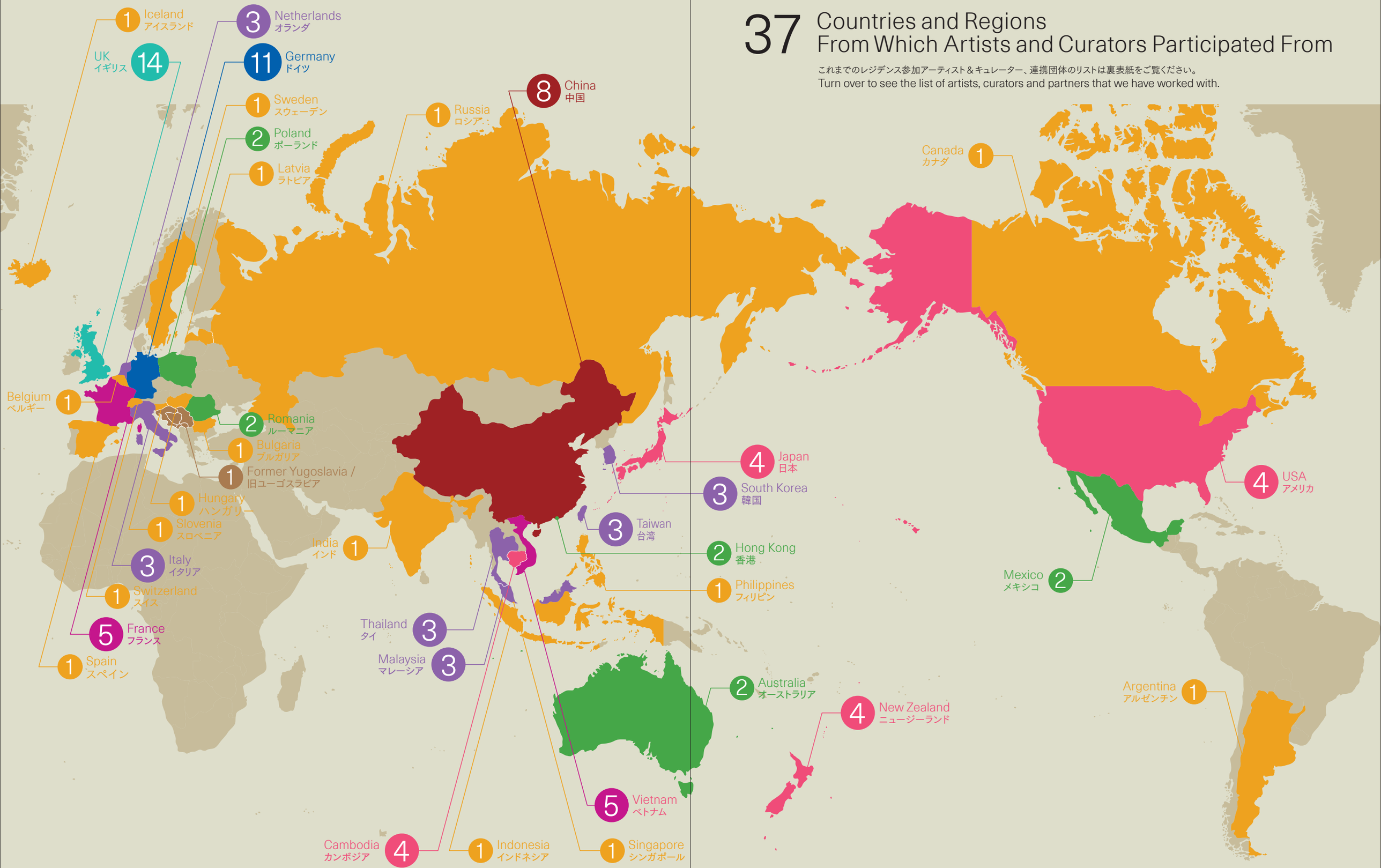
Other Projects

In the past, S-AIR has organised different projects such as "Artist-in-School" (now run by AIS Planning) with a new approach, in which the idea of residency has been taken into an educational environment including community centres and elementary schools.
Other than the residency programme, we organise various art projects, music performances and other cultural events. Most recent notable projects include Snowscape Moere (2005-2013), an annual winter art festival at Moerenuma Park, and curation and production of exhibitions for 500m Gallery (2012-2014, co-organised in partnership with CAI in the financial year 2013). Since 2015, in order to share our expertise and network, we have been organising AIR CAMP, a 3-day workshop for those who want to develop management skills to run a residency programme.

Whilst many organisations use their own spaces to run residency programmes, S-AIR is unique in the way it does not run any space except studios for international artists. This is why S-AIR can work flexibly case by case according to the type of projects and the artists' requirements, which is one of the strong characteristics of S-AIR. Through this flexible process, new project opportunities always arise naturally with other institutions and organisations, which leads to the spread of a wider network. The 2020 pandemic was a challenge, but an opportunity for us to expand our activities online, research and networking on arts and activities, supported public art programmes and artists. We hope to continue creating platforms of cultural projects in Sapporo and in Hokkaido.

37 Countries and Regions From Which Artists and Curators Participated From

これまでのレジデンス参加アーティスト＆キュレーター、連携団体のリストは裏表紙をご覧ください。
Turn over to see the list of artists, curators and partners that we have worked with.



105 participants from 37 countries and regions in total 計37カ国・地域、105組

1999-2022
Artists & Partners

105 Past Residency Artists and Curators
招へいアーティスト・キュレーター

As of March 2023, programmes longer than one month
1999-2022年度 招へい作家・キュレーター活動拠点国・地域別累計　※2022年度終了時現在、1カ月以上の滞在者対象（オンライン含む）

UK（イギリス）

Elizabeth LeMoine (Canadian National)
エリザベス・レイモン（カナダ国籍）

Lee Triming
リー・トライミング

Paul Jones
ポール・ジョーンズ

Emily Bates
エミリー・ベイツ

Julia Lohmann (German National)
ユリア・ローマン（ドイツ国籍）

Patricia Thoma (German National)
パトリシア・トーマ（ドイツ国籍）

Gemma Anderson
ジェマ・アンダーソン

Karen Kramer (USA National)
カレン・クレーマー（米国籍）

Ele Carpenter
エリ・カーペンター

Warren Harper & James Ravinet
ウォレン・ハーパー &ジェームス・ラヴィネット

Jeremy Hutchison
ジェレミー・ハッチソン

Helen Grove-White
ヘレン・グローブ・ホワイト

Morgan Quaintance
モーガン・クエインタンス

Meitao Qu
メイタオ・チイー

Germany（ドイツ）

Anke Dessin
アンカ・デッシン

Karin Boine
カリン・ボーネ

Inga Beyer
インガ・バイヤー

Sebastian Zarius
セバスチャン・ザリウス

Tjorg Beer
チョーク・ビアー

Regina Frank
レジーナ・フランク

Julia Wandel
ユリア・ヴァンデル

Bjoern Karnebogen
ビヨン・カーネボーゲン

Anna Vuorenmaa (Finnish National)
アンナ・ヴオレンマー（フィンランド国籍）

Michael J.Baers (USA National)
マイケル・ベアーズ（米国籍）

Thomas Neumann
トーマス・ノイマン

China（中国）

Qiu Zhijie
チュウ・ジージェ

Wang Zhen Zhen
ワン・ゼン・ゼン

Morgan Wong Wing-fat
モーガン・ウォン・ウィンファン

Chen Hangfeng
チェン・ハンフォン

Zoe Zhang Bing
ゾーイ・ザン・ビン

Liu Yi
リュー・イー

Yan Lei
ヤン・レイ

Yi Lian
イー・リアン

France（フランス）

Laurent Pernot
ローレン・ペルノー

Jermie Cortial
ジェレミ・コルチアル

Thibault Gleize
ティボ・グレイズ

Nicolas Boulard
ニコラス・ブラー

Eva Gerson
エヴァ・ジェルソン

Vietnam（ベトナム）

Phuong Hoang Bich Le
フオン・ホアン・ビック・レー

Lan Ngoc Pham
ラン・ゴック・ファム

Thu Kim Vu
トゥー・キム・ヴー

Tuan Tran
チュアン・トラン

Nguyen Anh-Tuan
グエン・アン・トゥアン

Cambodia（カンボジア）

Sok Than
ソック・タン

Sophal Neak
ソパル・ネ

Rithchandaneth Eng
ラッチャンダナエ・エン

Maline Yim
マリーン・イム

Japan（日本）

Michiyoshi Isozaki
磯崎道佳

Tadasu Takamine
高峰格

Takao Minami
南隆雄

Shujiro Murayama
村山修二郎

New Zealand（ニュージーランド）

Janet Lilo
ジャネット・リロ

Steve Carr
スティーブ・カー

Tim J. Veling
ティム・J・ヴェリング

Matthew Cowan
マシュー・コーワン

USA（米国）

Roy F. Staab
ロイ・スターブ

Anthony Luensman
アンソニー・ランスマン

Justin Ambrosino
ジャスティン・アンブロシーノ

Midori Hirose
ミドリ・ヒロセ

Italy（イタリア）

Marco Ferraris
マルコ・フェラーリス

Fabrizio Corneli
ファブリィオ・コルネーリ

Brunno Jahara (Brazilian National)
ブルーノ・ヤハラ（ブラジル国籍）

Malaysia（マレーシア）

Yoong Chia Chang
ヨンチア・チャン

Sharon Chin
シャロン・チン

Haslin Bin Ismail
ハスリン・ビン・イスマイル

Netherlands（オランダ）

Gianni Plescia (German National)
ジャンニ・プレッシャ（ドイツ国籍）

Marian Laaper
マリアン・ラパー

Bas Noordermeer
バス・ノールデルメール

24 S-AIR Award: Partner Organisations and Participants
交換プログラム連携団体と派遣アーティスト

South Korea（韓国）

Nak-Beom Kho
ナッポン・コー

Sanghee Song
シャンヒ・ソン

Ah-Bin Shim
アービン・シム

Taiwan（台湾）

Yen-Yi Chen
イエンイー・チェン

Chaong-Wen Ting
チャオン・ウェン・ティン

Zian Chen
ジーアン・チェン

Thailand（タイ）

Apichatpong Weerasethakul
アピチャッポン・ウィーラセタクン

Michael Shaowanasai
マイケル・シャオワナサイ

Patavee Viranuvat
パタヴィー・ヴィラヌヴァット

Australia（オーストラリア）

Matt Calvart
マット・カルバート

Wade Peter Marynowky
ウェイド・P・マイノウスキー

Hong Kong（香港）

Yau Ching
ヤウ・チン

Leung Chi Wo
レオン・チーウー

Mexico（メキシコ）

Ryuichi Yahagi (Japanese National)
矢作隆一（日本国籍）

Cecilia R. Corzo
セシリア・コルソ

Poland（ポーランド）

Monika Sosnowska
モニカ・ソスノヴスカ

Jerzy Goliszewski
イェージー・ゴリシエフスキ

Romania（ルーマニア）

Silvestru Munteanu
シルヴェストゥル・ムンテアーヌ

Anca Mihulet
アンカ・ミヒュレット

Argentina（アルゼンチン）

Florencia Levy
フロレンシア・レビー

Belgium（ベルギー）

Loreta Visic (Croatian National)
ロレッタ・ヴィシーチ（クロアチア国籍）

Bulgaria（ブルガリア）

Neno
ネノ

Canada（カナダ）

Marie-Josse Saint-Pierre
マリー・ジョセ・サン・ピエール

Hungary（ハンガリー）

Andi Schmied
アンディー・シュミート

Iceland（アイスランド）

Magnus Birkir Skarphedinsson
マグノス・スヤープヘッドインスソン

India（インド）

Ronny Sen
ロニー・セン

Indonesia（インドネシア）

Julia Sarisetiati
ジュリア・サリセティアッティ

Latvia（ラトビア）

Kristaps Gulbis
クリスタップス・ゴォルビス

Philippines（フィリピン）

Lindsey James Lee
リンジー・ジェームス・リー

Russia（ロシア）

Dmitri Prigov
ドミトリー・プリゴフ

Singapore（シンガポール）

Royston Tan
ロイストン・タン

Slovenia（スロベニア）

Metod Frlic
メトード・フルーリッツ

Spain（スペイン）

Sonia Fernandez Pan
ソニア・フェルナンデス・パン

Sweden（スウェーデン）

Marit-Shirin Carolasdotter
マリット・シリン・カロラスドッター

Switzerland（スイス）

Isamu Krieger
イサム・クリーガー

Former Yugoslavia（旧ユーゴスラビア）

Aleksandar Dimitrijevic
アレキサンダー・ディミトリエヴィック

Cambodia（カンボジア）

Sa Sa Art Projects
Tengshing Kazama
風間天心

China（中国）

office339
Mimona Ishikura
石倉美萌菜

Points Center for Contemporary Art
Masanori Matsuda
松田壯統

Yasuhiro Morinaga
森永泰弘

France（フランス）

Le lieu unique
Kiyoshi Takahashi
高橋喜代史

Japan, Maizuru（日本、舞鶴）

MAIZURU RB
Mikio Saito
斎藤幹男

Malaysia（マレーシア）

HOM Art Trans
Fuyuka Shindo
進藤冬華

Mexico（メキシコ）

Galeria Nebulosa
Ikuko Imamura
今村育子

Netherlands（オランダ）

Kaus Australis
Noriko Mitsuhashi
三橋紀子

New Zealand（ニュージーランド）

Whitecliffe College of Arts & Design
Takuro Kotaka
小鷹拓朗

Unitec
Kiyoshi Takahashi
高橋喜代史

Yuhei Higashikata
東方悠平

Romania（ルーマニア）

Samuel von Brukenthal Foundation
Rie Kawakami
川上りえ

Tetsuro Kano
狩野哲郎

Taiwan（台湾）

STOCK20
Shino Hisano
久野志乃

Bamboo Curtain Studio
Tetsushi Tomita
富田哲司

Masanori Fujiki
藤木正則

Thailand（タイ）

ComPeung
DRIVE HOME
(Hiroyuki Nogami, Naoto Okawada)
ドライブ・ホーム
（野上裕之、岡和田直人）

UK（イギリス）

QSS
Kiyoshi Takahashi
高橋喜代史

Arts Catalyst
Kota Takeuchi
竹内公太

Troy House Art Foundation
Ryusuke Ito
伊藤隆介

Fuyuka Shindo
進藤冬華

USA（アメリカ）

International Arts Movement
Fumie Ando
安藤文絵

End of Summer
Chisei Kobayashi
小林知世

npo S-AIR

Naebonart 2022

主　催　特定非営利活動法人S-AIR
助　成　文化庁 令和4年度アーティスト・イン・レジデンス活動支援を通じた国際文化交流促進事業
令和4年度 札幌文化芸術交流センター SCARTS 文化芸術振興助成金（公益財団法人札幌市芸術文化財団）
公益財団法人北海道文化財団
連携団体　トロイハウス芸術財団
ヘリテージ・スペース
なえぼのアートスタジオ
0地点

Organised by: NPO S-AIR
Funding Bodies: Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, Fiscal Year 2022,
2022 Sapporo Cultural Arts Community Center SCARTS Culture and Arts Promotion Subsidy Grant,
Hokkaido Arts Foundation
Partner Organisations: Troy House Art Foundation (UK), Heritage Space (Vietnam),
naebono art studio (Sapporo), Zero Chiten (Sapporo)

Acknowledgement／謝辞（敬称略、順不同）
北海道教育大学岩見沢校アートプロジェクト研究室、さっぽろ天神山アートスタジオ、ダム ダン ライ、須之内元洋、
細川健裕、武田浩志、小牧りな、小牧寿里、龍口桂、荒岡信孝、上遠野敏、国松希根太、吉田卓矢、吉田みなみ、
相吉正亮、相吉京子 、Yuan Gong, Chunchun Yao, Zuizui Yang, Lu Chuang, Gillean Dickie, Misako Kasahara,
Dee Petersen, Nuraan Petersen, Valerie Price, Matt Webb, Yuki Miyake

We would also like to thank all of those who helped the artists and S-AIR running the programmes.
Their generous and enthusiastic support is greatly appreciated.
その他アーティストの制作や滞在にご協力頂いた皆様に心よりの感謝の意を表します。

令和4年度活動報告書

編　集　特定非営利活動法人S-AIR 事務局
翻　訳　株式会社ジャパンプレミアム
越膳こずえ
布施南風
撮　影　山岸靖司
特定非営利活動法人S-AIR事務局
アーティスト本人による撮影
デザイン　小川陽
印　刷　札幌大同印刷株式会社

特定非営利活動法人 S-AIR
060-0032 札幌市中央区北2条東15丁目26
なえぼのアートスタジオ2F
Tel: 011-299-1883
Web: www.s-air.org
Email: info@s-air.org

事務局
代表：柴田尚
プログラム・ディレクター：橘匡子
アシスタント・ディレクター：川上りえ

発行年　2023年

Annual Report 2022

Edited by　NPO S-AIR
Translation　Japan Premium Co., Ltd.
Kozue Etsuzen
Minami Fuse
Photographs　Seiji Yamagishi
NPO S-AIR
the artists
Design　Yo Ogawa
Printed by　SAPPORO DAIDO PRINTING Co., Ltd.

NPO S-AIR
Naebono Art Studio 2F
Kita 2-jo, Higashi 15-Chome 26, Chuo-ku, Sapporo
060-0032, JAPAN
Tel: +81 11 299 1883
Web: www.s-air.org
Email: info@s-air.org

Director: Hisashi Shibata
Programme Director: Kyoko Tachibana
Assistant Director: Rie Kawakami

Published in 2023